

## 会頭講演

# 国医大師・路志正の 臨床学術思想

## ～通三焦達表裏，辛香走泄調五臟～

### Clinical and academic thought of Chinese Medicine Master Lu Zhizheng

路 京華

LU Jinghua

中国中医科学院广安門医院 客員教授

Guang'anmen Hospital, China Academy of Chinese Medical Sciences

## 要旨

私の父，路志正の学術思想をまとめてご報告いたします。

彼は「脾は嬌臓」だと述べ、臨床で脾胃を最も重視しました。これは、単に消化器系の疾患だけでなく、脾胃を調節することによって五臓六腑の難治性疾患を治すことができることを意味しています。その学術思想をまとめて「持中央，運四傍，怡情志，調升降，顧潤燥，納化常」という六綱十八字の口訣を作りました。

中医学はバランス（平衡）の医学といえますが、平衡とは単にバランスということではありません。そこでは「動」が強調されており、動態運動のなかで平衡が保たれ、動態の昇降出入のなかでバランスを調節することが非常に重要であると考えられています。

現代の病気の特徴は「飽食多飲，神形両傷，六鬱膠結」，つまり「滞る」病態が多いということです。滞った結果が六鬱です。六鬱とは，気血の壅滞・痰・火・湿・食などの代謝物が体に蓄積した状態です。そのため現代の病気はなかなか治りにくいのです。

治療に際して，父は2つの軸を大事に考えています。1つは脾胃を中央に置いた五臓の昇降の枢軸で，もう1つは少陽の枢軸です。

また彼は「善治者治皮毛」と強調し，「表裏若一」，つまり表裏は1つだと考えています。両者は生理・病理に深く関わって相互に影響し合い，分けることのできない統一体です。さらに六経弁証と三焦弁証には，一横一縦の巧妙さがあります。『傷寒論』の六経弁証の場合，太陽経から陽明経，少陽経……，厥陰経へと進んでいき

ます。これはいわば横からの見方で、三焦弁証は上焦、中焦、下焦という縦から見えています。三焦には、表裏を通し、上下をつなげる枢機の働きがあります。

父が疑難病を治療する際、縦横一体の表・裏・枢の3者と内臓の関係を調整し、上・中・下三焦を巧みに分消・走泄して治療しています。表裏を交通させ、枢機回転し、三焦上下の気機を通じさせて、「四門」を上手に開くことで、体内の鬱熱・痰火・湿積・宿食・残便などの代謝物を排泄させて治療しています。例えば防風通聖散は、この四門を開いて、代謝を促進する代表的な方剤で、銀翹散は上下分消の方剤です。

用薬においては、彼は宣降を重視し、宣散・宣降させる梗（茎）や葉の薬を多く配合します。梗は宣降に偏っていると考えています。

また父はよく「大道無形、大医無方」と言っていました。大道には形がなく、大医はルールに縛られず、病気には定まった型がありません。したがって治療に際しては、決まった治則や処方もなく、臨機応変に対応し（圓機活法）、証に随って変通しなければなりません。これを一文字でいえば、『易経』の「変」ということになります。つまり私たちは変に応じてしっかりと弁証論治しなくてはなりません。

キーワード：路志正，脾胃，六鬱，六経弁証，三焦弁証，防風通聖散，銀翹散，宣降，「大道無形，大医無方」

## 脾胃を調節することで五臓六腑の難治性疾患を治療

本日は、私の父、路志正の学術思想をまとめて皆さんにご報告いたします。テーマは「通三焦達表裏，辛香走泄調五臓」（三焦を通じさせて表裏を通達し、走泄作用をもつ香りの良い辛味の薬物を用いて五臓を調理する）です。

私の父は現在95歳で、中医学を実践するようになって80年になります。この80年の経験のなかで彼は色々と自分の考え方、独自のやり方をもって臨床を行ってきました。彼が臨床で最も重視するのが脾胃です。これは、単に消化器系の疾患だけでなく、脾胃を調節することによって五臓六腑の難治性疾患を治すことができるという意味があります。

「持中央，運四傍，怡情志，調昇降，顧潤燥，納化常」という言葉は、父の学術思想をまとめて作った六綱十八字の口訣です。最初の「持中央」とは、脾胃が

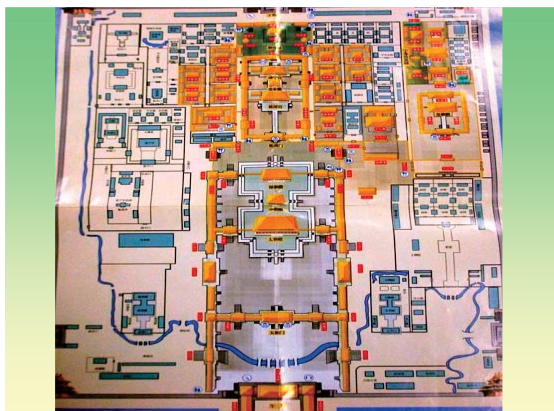


図1

五臓のなかで重要な位置にあることを表しています。「中央」は、単に真ん中という意味ではなく、五行でいう中央、数字でいえば五で表現されるものです。五とは、真ん中が最も重要で、それが「四傍」（四方）の臓器をコントロールする力をもっているという意味があります。

このスライド（図1）は、故宮博物館を上から見た絵です。太極・陰陽・五行・八卦といったものを真似て作ったものですが、中央に3つの殿堂があります。現在の太和殿・中和殿・保和殿ですが、この位置に作ったのは「土」の意味からです。ここが国の中心であるという意味もあります。つまり、ここを通して中国全土を支配するという意味を表しているのです。また古代の皇帝は「九五の尊」と呼ばれていました。九という数字は奇数のなかで最も大きく、五は中心で最も偉いことを表しています。

「運四傍」とは、周りの4つの臓器との関係を表しています。中央の脾胃を調節することで周囲の臓器の病気を治すことができるということです。これをどう理解すればよいのかというのが、次のスライド（図2）です。

### 善調升降，“動”中求衡

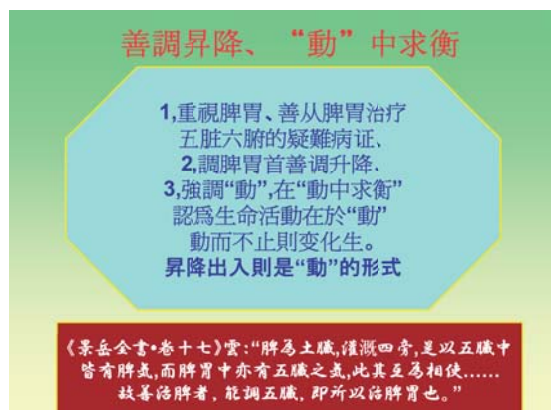


図2

『景岳全書』のなかでは、脾は土臓で、四方の臓を灌漑している、つまり4臓に養分を提供していることが述べられています。また五臓のなかには、すべて脾気があり、しかも脾胃のなかにも五臓の気があって、その気は互いに影響し合っているため、脾を上手に治療すれば五臓を調節できることが述べられています。

脾胃は重要で、胃は燥を主って湿を好み、脾は湿を主って燥の状態を好みます。胃の働きは受納を主り通降を順とし、脾の働きは運化ですから、これらを調節すれば昇降相因・湿燥相宜・納化作用が正常となります。

先ほど紹介したように、脾胃は中央にあつて、周囲の4つの臓器に影響を与えています。一方、4つの臓器に病気があつた場合には、必ず脾胃にも影響します。ですから父は、「脾は嬌臓だといえる」と言いました。一般に嬌臓は肺だといわれます。しかし、脾は冷たいものや熱いものに耐えにくいという、水穀の穀気だけを受け入れて、他の臓器の邪気を受け入れず、他の臓器の影響がある場合も、胃が痞えたり、嘔吐したり、痛んだり、下痢したりします。やはり自然界という外環境とつながっています。もちろん気管支は呼吸によって外気道とつながり、

さらに食道も外環境とつながっています。ですから肺だけでなく、脾も嬌臓だといえるのです。つまり、脾は病気に罹りやすい臓器であることを表しています。

中医学は平衡、つまりバランスの医学ですが、平衡とは単にバランスということではなく、動態運動のなかに平衡が保たれると考えています。つまり、胃腸を重視して、五臓六腑の難治性の病気を脾胃から治療します。そして、脾胃を調節するには昇降を調整することが大事になります。さらに、“動”を強調しているのは、動態の昇降出入のなかでバランスを調節するのが非常に大事だからです。

## 飽食多飲、神形両傷、六鬱膠結

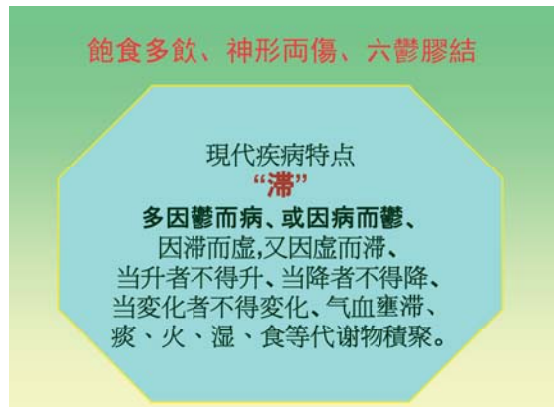


図3

現代の病気の特徴は「滯る」病態が多いということです(図3)。李東垣の『脾胃論』の時代は、食べものが十分になく、補中益気湯を代表として、ほとんど補気や健脾といった、補う治療が多かったのですが、現代、特に最近の中国では、食べ過ぎ、飲み過ぎ、それにストレスがかかることが多いため、精神的な問題もからんで、様々な病気が引き起こされています。

そうして滯った結果が六鬱です。六鬱とは、気・血の壅滞、痰、火、湿、食などの代謝物が体に蓄積した状態です。つまり滯るということですが、これは現代ではよく混合してみられます。多くは鬱によって病気になり、また病気によって鬱になります。滯ることによって虚となり、また虚になることによって滯ります。昇るものが昇らず、降りるものが降りられず、変化するものが変化できないと、様々な代謝物が体に溜まってしまうのです。

## 上古有疾、湯液醪醴、為而弗服

現在の病気はなかなか治りにくいということが、『素問』湯液醪醴論に書いてあります。上古の時代、医師は湯液と醪醴を作りましたが、作って備えていただけで常に用いてはいませんでした。邪気が人を傷つけた場合、湯液と醪醴をわずかに服用すれば、病気はすぐによくなりました。中古の時代になると尊道修徳という理念が少し悪くなり、現在(『素問』の時代)は薬物を内服し、砒石・鍼灸で体表から治療しなければなりません。なかなか効果が出にくいのは、嗜欲、つまり欲張りが多過ぎて、精神的な憂慮や不安に限りがないため、精気が壊れて、営血が枯渇し衛気が失われてしまって、神気が働かなくなり、治療に対する反応

も失われてしまうため病気がなかなか治りにくいのです。つまり『素問』で強調している神形若一の状態が破壊された状態です。

### 脾胃と少陽という2つの枢軸を同時に調節する



図4

私の父は治療に際して、2つの軸を大事に考えています(図4)。1つは脾胃を中央に置いた五臓の昇降の枢軸で、もう1つは少陽の枢軸です。このように人体には2つの枢軸があって、脾胃が上下の枢軸、少陽が横の枢軸だと考えています。父は、この2つの枢軸を上手に調節して治療しています。方剤は、柴胡剂・温胆湯・蒿芩清胆湯などを少陽の薬としてよく使いました。こうした方剤を脾胃の気機を疏調するなかに加えて同時に治療するのがポイントです。調気には梗(茎の部分)を使い、宣散には葉を使って、三焦を通じさせて表裏を通達し、香りの良い辛味の薬物を用いて走泄させて五臓を調理します。

この学術思想は次の文献を理解すればわかりやすいと思います。

『医学求是・血証求原論』では「土位于中，而火上，水下，左木，右金；左主昇，右主降。五行之昇降，以氣不以質也，而昇降之極，又在中氣，中氣在脾之上，胃之下，左木，右金之際，水火之上下交濟者，昇則頼脾之左旋，降則頼胃之右旋也。故中氣旺，則脾昇胃降，四象得以輪旋」と言っています。つまり土を中心に、左に木、右に金が位置して、水火の上下が交差しています。昇る際は脾に頼って左から回り、降りる際は胃に頼って右から回ります。つまり中気が旺盛であれば、脾によって昇り胃によって降りて、周囲の4つの臓も動かすことができるということです。

朱丹溪も「脾具坤静之徳，而有乾健之運，故能使心肺之陽降，肝腎之陰昇，而成天地交泰矣」と述べています。脾は坤、つまり陰、地です。静かな徳をもっており、しかも、臓器が静かでも、気的作用としては健運という意味ももっており、こうした脾胃を上手に動かすことができれば、上焦に置く心と肺の陽気を下に降ろし、下焦に置く肝腎の陰を上昇させることができ、それによって天と地の交泰の形になると言っています。

また『医碁』という本のなかに簡単にまとめたものがあり、「脾胃居中焦，為上下昇降之枢紐」，つまりここでも脾胃は中焦にあり上下昇降の枢軸であると言っています。

## ■ 表裏をうまく調節する

### 表の概念

私の父が治療する際には、もう1つ、表を重視します。表とは、皮膚の毛竅で、玄府・気門・鬼門という名称があります。皮膚は、人体最大の器官で、成人では1.2～2m<sup>2</sup>の広さがあり、全身を包んで、外からの障壁になっています。強大なエネルギーを有しており、太陽経気が分布しています。太陽経は最も長い経脈で、経穴の数も多いです。太陽経脈は六経の営衛を束ねており、衛外固表の機能を有しています。内側では少陰と関係しており、命門の火の支援を受けて、太陽と少陰で互いに表裏の関係にあります。

### 邪侵之所，亦驅邪之处

表は邪気の侵入するところです。そのため、『素問』調経論では、「風雨之傷人也。先客於皮膚。伝入於孫脈。孫脈満。則伝入於絡脈。絡脈満。則輪於大経脈」とあって、風雨といった自然界の異常な気候・変化で人が傷つく場合、邪はまず皮膚から侵入すると言っています。また「湯液醪醴論」では「夫病之始生也。極微極精。必先入結於皮膚」ともあります。ですから、「陰陽応象大論」に「故善治者治皮毛。其次治肌膚。其次治筋脈。其次治六府。其次治五蔵。治五蔵者。半死半生也」とあるように、邪気の侵入するところが、邪気を祛う場所だと考えていました。つまり『素問』では、上手く治療するには、まず皮膚から治療すると考えていたのです。

### 表裏概念の相対性

表裏とは、絶対的なものではなく相対的なものです。まず六経から表裏を分ける場合、①三陰三陽によって表裏を分けます。②太陽が表で、他の経は裏に分けます。③太陽は表、陽明は裏に分けます。④陰経と陽経を合わせて表裏に分けます。例えば太陽経では、先ほど話したように腎の少陰経との関係もあり、太陰と陽明の表裏関係もあり、厥陰と少陽の表裏関係もあります。⑤三陽経と三陰経それぞれの表裏関係もあります。例えば三陽経では、太陽が表で陽明が裏、少陽が半表半裏です。三陰経では、太陰が表で厥陰が裏で、少陰が半表半裏と考える分け方もあります。

### 表裏相連，一氣貫通，分則無尽，合則為一

じつは、表裏は分ければいくらでも分けられますが、合わせると1つの気になります。したがって、表と裏は明確に分けることができず、じつは1つの気によって表裏を貫いていると考えられます。表裏とは多層性で相対的に対立しており、生理・病理に深く関わって相互に影響し合い、分けることのできない統一体なのです。ですから、現在の八綱弁証において、表裏の内容の多くは、表証と裏証の各自の内容を強調してしまっており、臟腑・経絡・気血・陰陽表裏の間にある一貫した関連性を軽視して、2者に分けてしまったという不十分なところもあります。

表裏若一

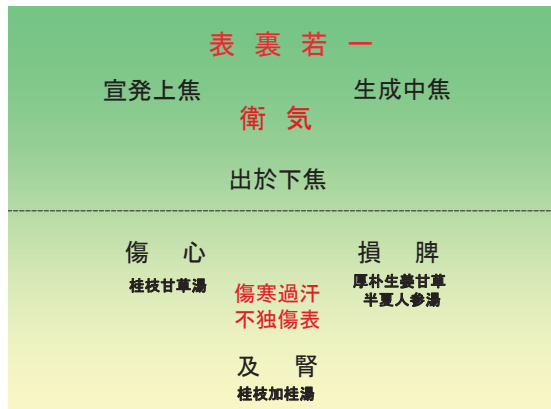


図5

表裏が1つだと考えられる例を出しましょう（図5）。例えば，外側にある衛気は中焦で生成されます。その衛気を宣發するのが上焦の肺のところで，表にある衛気は下焦の腎からの応援も得て，外側の防御能力を発揮させています。したがって，この表裏は1つのものといえます。

『傷寒論』には，「太陽病のときに発汗させ過ぎると，表を傷つけるだけでなく，心を傷つけ動悸がしたりする。その時は桂枝甘草湯を使う。また発汗させ過ぎると，脾を損傷してガスが溜まって膨満したりする。その時には，厚朴生姜甘草半夏人參湯を用いる。さらに発汗させ過ぎると，影響が腎に及び腎陽が足りなくなり，まるで奔豚気のような病証が起こったりする。その時には桂枝加桂湯を用いる」とあります。つまり，表の病気を治療するときには，上手にしなければ内側の心や脾，腎といった臓も傷つける恐れがあるということです。ですから，生理的にも病理的にも，表裏はすべて1つだと考えることができます。

裏氣和表自通

そのため，治療においては裏氣が和すれば，表は自ずから通じるというやり方を行います。一般的に表が通じなければ，表だけを考慮して解表剤などで治療します。しかし実際には，表の病気でも，裏の気を調和させると自然に治ることがあります。このことは『傷寒論』においても，虚人（体の弱い人）が外感にかかったときには，小建中湯を用いて中焦を立て直すことを述べています。つまり「傷寒二三日。心中悸而煩者。小建中湯主之」とあって，傷寒となって2～3日経って，心中に動悸がして煩わしさがあれば，小建中湯で治療すると言っています。

また裏氣が充実し調和すれば，表気を治療しなくても自然に治ることも述べています。「脈浮数者，法当汗出而愈，若下之，身重心悸者，不可發汗，当自汗出乃解，所以然者，此裏虚，須表裏実，津液自和，便自汗出愈」とあって，患者の脈が浮数なら，原則的には発汗させれば治癒するが，もし誤って攻下法を用いて，それによって体が重く感じたり動悸がしたりする場合は，さらに発汗させてはならない。自汗を出させて解表することを考える。なぜなら，これは裏氣が不足しているからで，表裏の気が充実すれば津液は自然と調和し，その結果，自然に汗が出て病は治癒すると述べています。つまり，裏を充実させれば，表では自然に汗が

出ることがあるのです。

## 表病治裏，裏病治表

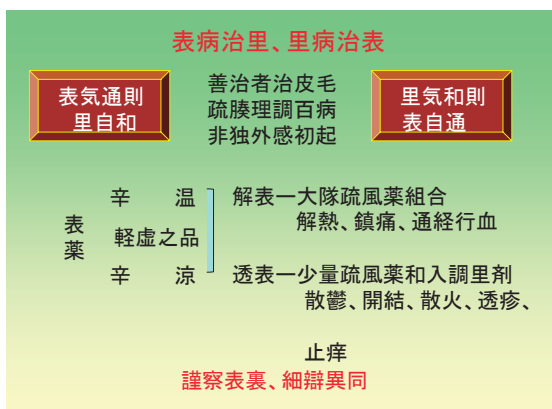


図6

また、表の病気の場合は裏を治療して、裏の病気の場合は表を治療するという言葉もあります（図6）。そのため、中医学では「上手に治療する者は皮毛から治療する」といわれます。これは、外感病の場合に限らず、腠理を調節すれば、様々な病を治せるということでもあります。解表薬には、辛温のものと辛涼のものがありますが、1つの特徴として、ほとんどが軽虚の品です。こういうものが発散させることができます。ただ、疏風薬をたくさん組み合わせれば解表となり、解熱、鎮痛、通経行血することができますが、少量の疏風薬に、裏を調節する薬を入れれば、そのときには、解表ではなく、透表となり、散鬱、開結、散火、透疹、止痒することができます。

## ■ 枢機を巧みに調節する

### 少陽枢

次に枢機の大切さについて紹介します。枢には少陽の意味も含まれています。枢は、枢紐、つまり交わるところで四方八方に通達するという意味があります。また門枢、つまりドアですが、枢軸、可開可閉（開閉できる）という意味もあります。さらに中枢、つまり中心でコントロールするという意味もあります。

### 少陽三焦的概念

少陽には手の少陽三焦と、足の少陽胆経の2つがあります。中医学の少陽三焦理論に対する認識は中医学の特徴の1つです。

### 溝通表裏，連接上下，運送熱能

表裏を通じさせ、上下を連絡して、エネルギーを運んでいるというのが三焦の機能です。私の父は、「焦」とは熱（エネルギー）の意味で、少陽三焦は熱エネルギーを有し、体温を維持するエネルギーと、内臓機能のエネルギーの腑だと考えています。三焦には相火があり、下焦に源のある相火を守り、三焦の気道を通



じて全身に輸布されます。いわゆる元気の別使です。そのため、「三焦与命門相表裏」「腎将両臟三焦，膀胱」の説があります。内側では膜原の形で臟腑を統括して，三焦に属する臟腑を通り，外側では腠理とつながって，三焦の元真が集まるところです。交通の枢軸のように四方を通達させる巧妙さをもっています。

### 弁有形無形，不若印証其用

これまで三焦に対しては，有形か無形かで長年論争がありました。私の父は，中医基礎理論の藏象学説は中医学の特徴の1つであり，中国文化の象数の思考に基づき，単純な解剖学的概念とは異なり，藏象には「臟」と「象」の2つの意味が含まれていると考えていました。「有形」という者の多くは「臟」の観点から論じ，「無形」という者は「象」の観点から論じているのです。両者は見方こそ異なりますが，両方を合わせることで，全体を見ることができます。つまり三焦が有形か無形かを論じるよりも，いかにその理論を使って臨床に応用するかを考えたほうがよく，そうすることで本当の中医学の特色を打ち出すことができると考えていました。

### 少陽三焦同気相連，有縦横之妙

六経弁証と三焦弁証には，一横一縦の巧妙さがあります。つまり『傷寒論』の六経弁証の場合，太陽経から陽明経，少陽経……，厥陰経と進んでいきます。これはいわば横からの見方で，一方の三焦弁証は，上焦，中焦，下焦という縦から見えています。三焦には，表裏を通し，上下をつなげる枢機の働きがあります。

葉天士は『温熱論』において，「再論氣病有不伝血分而邪留三焦亦如傷寒中少陽病也。彼則和解表里之半，此則分消上下之勢，随証变法，如近時杏，朴，苓等類，或温胆湯之走泄。因其仍在氣分，猶可望其戰汗之門戸，転瘳之機括」と述べています。気分の病気で，血分に伝わらず，邪氣が三焦に留まると，まるで『傷寒論』の少陽病のようだと言っています。『傷寒論』では，半表半裏を和解すると言っていますが，温病では，上下の勢を分消します。例えば，杏仁・厚朴・茯苓など，あるいは温胆湯の走泄ですが，杏仁が上焦，厚朴が中焦，茯苓が下焦で，温胆湯も分消走泄する作用があります。

こういう意味でいえば，『傷寒論』は横から見ると六経弁証で，温病学の三焦弁証は縦から見ているということになりますから，両者はまったく異なったものともいえません。

### 巧運三焦，可拔千斤

三焦の動きを上手く改善すれば，軽い薬でも重症の病状を改善できます。『傷寒論』における少陽の半表半裏の和解と，上中下三焦の分消走泄とは，同じ臟腑機能における2つの顔であり，相伝相成して相互に促進・協調する統一体です。例えば，表裏を疏通して，気運を和諧すれば，三焦の気機を降ろせると考えています。小柴胡湯は，表裏の和解ができるだけでなく，上下の疏通もできます。例えば，『傷寒論』の陽明病篇に「陽明病，脇下硬満，不大便而嘔，舌上白胎者，可与小柴胡湯。上焦得通，津液得下，胃氣因和，身濈然汗出而解」とあります。脇下の部位が硬く膨満し，大便が出ずに吐き気が起こり，舌に白苔がある場合は，小柴胡湯を投与すればよい。小柴胡湯を服用すると，上焦の気が通じ，すると津

液は下に降りることができ、胃気の働きが順調になって、全身からジワッと汗が自然に出てきて病は治癒します。ですから、この小柴胡湯は単に表裏のことでなく、上下のことも言っています。

## 慎調運枢，五臟和，八方通

三焦については様々な考え方がありますが、私の父は、外感熱病に限らず内傷雑病でも少陽三焦を調達することによって軽靈活発な効果を得ることができると考えています。それは『中蔵経』における三焦の論述と一致します。『中蔵経』論三焦・虚実寒熱生逆死順脈証之法には、「三焦通，則内外左右上下皆通也。其于周身灌体，和内調外，榮左養右，導上宣下，莫大于此者也」と書かれています。三焦が通じれば、内外，上下，左右のすべてが通じるので、三焦を上手に調節すれば、体全体のめぐりをよくできます。内外を調和し，左右を栄養し，上を引き上げ下を宣発し，上下を運動させ，これよりも大事なところはないと言っています。

## 表裏交通，枢機旋轉，上下通暢，四門常利

表・裏・半表半裏は，病理段階が異なり，それぞれ独自の証型表現があります。いわゆる，開（太陽），闔（陽明），枢（少陽）の3者には切っても切れない相互関係があります。そのため，私の父が疑難病を治療するときには，縦横一体の表・裏・枢の3者と内臓の関係を調整して，上中下三焦を巧みに分消・走泄して治療していました。托裏達表（裏の病気を外側に出して治療する）あるいは，通裏安表（裏を通じさせて表を治す）によって，表裏を交通させ，枢機旋轉し，三焦上下の気機を通じさせて，四門（龍門・魄門・鬼門・吸門）を開くことで，体内の鬱熱・痰火・湿積・宿食・残便などの代謝物を排泄させて治療しています。

## 防風通聖は四門を泄開する

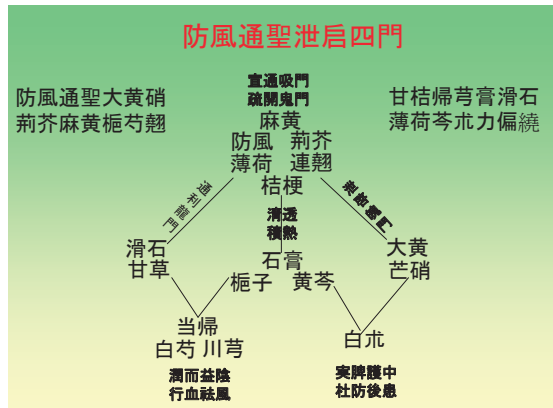


図7

例えば防風通聖散は，この四門を開いて代謝を促進する方剤です（図7）。1つめは吸門です。中医学では人体には7つの門があると考えていますが，吸門は喉にあって，呼吸を調節しています。2つめが鬼門です。鬼門は皮膚の毛竅のことです。これら吸門と鬼門を，麻黄・防風・荆芥・薄荷・連翹・桔梗などを用いることで，肺と皮膚を調節して発散させます。3つめは水を主る龍門です。滑石・

甘草などを使って、尿から湿を排泄させます。4つめが魄門です。これは肛門の意味ですが、大黃・芒硝を使って体に溜まっている便を排出させます。臨床においては、いかにして吸門・鬼門・龍門・魄門を上手に開いて邪気をはらうかを考えなければなりません。

### 銀翹散は上下分消の劑

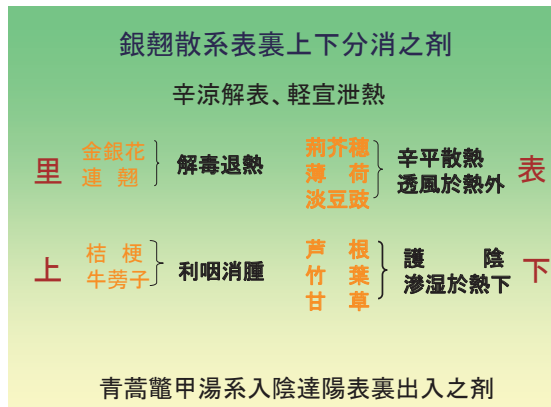


図8

銀翹散は上下分消の方劑です(図8)。銀翹散は、裏では金銀花・連翹で解毒退熱し、表では荊芥穂・薄荷・淡豆豉で辛平散熱・透風於熱外(熱を外側に透風する)します。上、つまり咽のところで、桔梗・牛蒡子を使って利咽消腫し、下では、芦根・竹葉・甘草を用いて護陰・滲湿於熱下(熱を下に滲湿する)します。つまり銀翹散は湿邪と風邪の病性を分けて治療する方劑なのです。

### 動中求衡先運枢

私の父は、昇降の調節は動中求衡が鍵だと考えています。少陽は昇を主り、脾もまた昇を主ります。ただし脾気が昇するには少陽の助けが必要です。補中益気湯中の柴胡は、少陽の昇発之気を動かすことによって、中気の昇清を助けます。そのため、父は脾胃の昇降を調整する際には、いつも適量の柴胡あるいは青蒿を加えることで少陽の気を舒達生発させ、気機の運転の力を増強させています。また温胆湯中に配伍されている柴胡は、蒿芩清胆湯中に三仁湯の意味を取り入れて、縦横上下、通達表裏の不思議な効用を増加させます。

### 巧用軽虚去壅実

私の父は、少陽三焦の表裏上下の気機を通達させる際、柴胡・青蒿などを用いるほかに、宣降を重視し、宣散・宣降させる梗(茎)や葉の薬を多く配合します。梗は宣降に偏っていると考えており、例えば蘇梗・荷梗・藿香梗などを用います。一方、葉は宣昇に偏っていると考えており、例えば枇杷葉・蘇葉・藿香葉・薄荷葉・荷葉・橘葉などを用います。あるいは花や穂の部分、例えば荊芥穂・金蟬花・玫瑰花・旋覆花などを用います。また梗、葉、穂を合わせて用いるときもあります。昇降を相因させ、散中に降を求め、散は降濁・舒胃・緩急によって行います。軽虚の薬を用いることで壅滞の実を去るのです。以上が臨床における具体的な応

用です。

### 昇陽不犯上，和降不傷中

私の父は、上下の調節に長けており、下に降ろすには重実沈降のものを合わせ、枳殻・枳実・厚朴・牛膝を多用し、なおかつ牛膝は大用量を用います。上に昇らすには桔梗・葛根・防風を多用しますが、防風は風薬中の潤剤と考えており、傷津耗陰の弊害がありません。

逆流挽舟法以外には、羌活・升麻・藁本などの風陽の品は多くは用いません。気躁・多鬱の方には、陽浮多亢させるため、これを用いると少陽の風火を蒸騰させやすくなります。

また昇陽は上を犯さず、和降は中を傷つけないと強調しています。

### 化湿于展氣之中，調氣于昇降之内

私の父が湿を治療する際には、三焦を調節することを考えます。つまり気がめぐれば湿も動き、気が滞れば湿も阻まれます。去湿するのは滲利ではなく気化です。気がめぐれば化し、気機が運転すれば滞りが解消され、新しいものが生じます。化湿は展氣のなかにあり、調氣は昇降のうちにあるのです。

また実際の運用では、湿が多ければ茵陳を加え、湿に熱を兼ねるものには黄芩・虎杖を用います。

### 大道無形，大医無方

大道には形はなく、大医は定まったルールに縛られませんし、病気には定まった型がありません。治療に際しては、決まった治則や処方もなく、臨機応変に対応し（圓機活法）、証に随って変通しなければなりません。したがって治療に際して大事になるのは、一文字でいえば『易経』の「変」ということになります。つまり私たちは変に応じてしっかりと弁証論治しなくてははいけません。以上です。